

気になる

1. ジョロウグモの雌

春に孵化(ふか)し、その後、風に乗って分散したジョロウグモの子は、小さ過ぎて目立ちません。しかし、打吹山で最も大型のクモですので、夏になると大きく派手になり存在感を増します。9~10月に成熟し、卵巣の発達した雌は、その色彩と大きな腹部が目につきます。網は同じものを補修して使うため、同じ位置で出会うことにもなります。

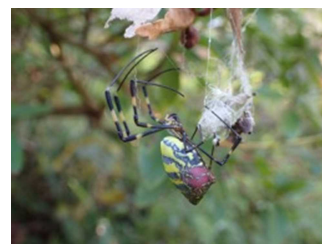
寒さを感じる10月下旬から11月、白い糸で編んだ袋で卵の塊を包み、平たい卵囊(らんのう)を物陰に産み付けます。すると、あの大きかった腹がスマートになります。食事量の差でしょうか、個体によって産卵は1ヶ月くらい差があります。



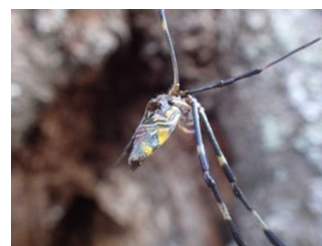
ジョロウグモの卵囊

産卵後も腹は小さくなっていますが生きています。餌は食べないようで、寒風の中でも網の中心にいて、やがて死んでしまいます。

鳥も食わず、網が破れて落下するまでそのままです。色彩は生死で変わらないため、つついて動きを見るか、脚が生時の踏ん張った位置にあるかで見分けましょう。



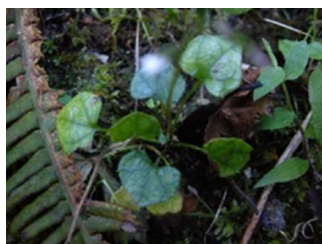
産卵前のジョロウグモ



産卵後のジョロウグモ

2. キッコウハグマ

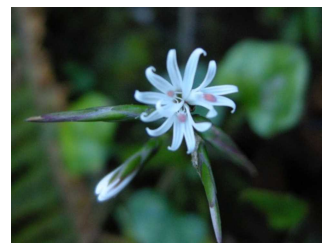
藪ではなく、やや乾き加減で少し陰になるようなところ、長谷の展望台の下など遊歩道の所々で見ることができます。側を歩いても通常は気付きません。ところが、開花すると目がいってしまいます。10月の終わりから11月の初め落葉樹が紅葉を始めた中で、小さい白点が目立つのです。



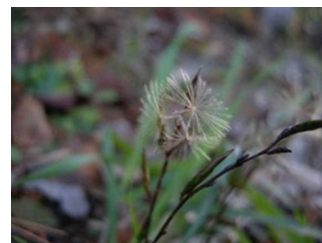
キッコウハグマの葉

これで観察終了では注意が足りません。キク科の植物は花が曲者です。1個の花のように見えるものは多数の花の集合体で、頭花と呼ばれます。キッコウハグマは3個の小花からなり、小花の一枚しかない花弁が5裂しているのです。キク科であることは、この後結実したのを見ると、茶色の綿毛のタンポポのようになっていることからわかります。

同じ場所の花をずっと観察していると、開花を確認していないのに結実穂の数が増えている場合に気付きます。閉鎖花という、開花することなく自分の花粉で受精してしまうものです。春を過ぎたスマレなどにみられる省エネの繁殖法ですが、寒さに向かう時期に開花・結実するキッコウハグマは、昆虫の受粉に頼ることができないことから、当然の戦略と思われる



5裂状の3個の小花の集まり



キッコウハグマの種子